

令和元年 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：釧路
 - 2 事例報告学校名：標茶町立塘路小中学校
 - 3 報告者職・氏名：校長 下山 孝善
 - 4 キーワード：ふるさと教育と環境教育の推進
-

1 はじめに

本校のある塘路は釧路市の北側に広がる日本最大の湿地「釧路湿原」の南部に位置しており、国道 391 号線沿いであることから古くから繁栄してきたが、道路交通網の発達と産業構造の変化により、人口の減少と高齢化が進んでいる。本校は豊かな自然と環境に恵まれ、家庭数 11 戸、学級数 6（うち特別支援学級 1）、児童生徒数 15 名の極小規模の小中併置校である。

2 「地域の教育資源を生かした」活動と「学ぶ力とかかわる力を高める」活動の推進

子ども達（小中を含めて）は豊かな自然環境の中、明るく素直に成長しており、学力も平均的なレベルである。しかし、へき地小規模校ということで、社会的な体験の機会や大集団の中でのコミュニケーションの経験が少ないことなどから、自分の考えを分かりやすく相手に伝えたり、まわりと協調したりしながら学習に取り組む力に弱さがみられた。そこで、地域の教育資源（観光資源）に目を向け、ふるさと塘路の素晴らしさを再発見するとともに、10 年後の「将来」を見据え、様々な人とかかわりをもつ活動の充実を図り、多様な方法で情報発信することを考えた。

3 具体的な活動（小学校高学年の総合的な学習の時間を通して）

～塘路の素晴らしさを再発見 他の地域の人たちに塘路のすばらしさを伝えよう～

教科時数が増える中、教育の質の向上に向けて、本校でも様々な体験活動を中心とする教育課程の見直しに取り組んできた。とりわけ、総合的な学習の時間におけるテーマとして観光資源を教育資源として捉えることで、他校には無い「強み」となり、本校ならではの体験活動を可能にしている。

(1) 計画【4月】

総合的な学習の時間のテーマを実現する計画を立てるために、「どうすればもっと塘路のすばらしさを伝えられるだろうか。」という教師の投げかけに対して、高学年の 2 人は、「塘路にはどんな素晴らしいものや場所があるのだろうか。」「私たちは、他の地域の人たちにどのようにそれを伝えればよいのだろうか。」という課題を持ち、早速学習計画の作成に取り組み始めた。

まず、目標設定と課題解決のために、「塘路のよさ、みんなに伝えるべきもの」を自由に発言させたところ、

- 塘路湖 ○ニタイ・ト（標茶町博物館） ○郷土館 ○ワカサギ釣り
- 歴史的遺跡や出土品 ○湿原やカヌーなどのアクティビティ
- ひしのみやワカサギなどの特産品 ○ノロッコ号や S L 釧路湿原号

などが挙がり、課題解決の糸口をつかむことができた。

次に解決方法（取材・調査）として、相手や場面に応じたまとめ方や表現方法など、今まで総合的な学習の時間の発表で取り組んできた方法を活用し、ビデオ番組、模造紙、プレゼンテーションソフト（P S）にまとめ発表することにした。さらに、交流及び発表する相手あるいは場面として、標茶小学校（6年生）、元村ハウスばる（体験ツアー施設）、ニタイ・ト（標茶町博物館）を想定した。

（2）取材・調査【5～10月】

事前の調査をもとに、お互いに協力しながら、カヌー体験（6/5）、ニタイ・ト（7/5）、ワカサギ工場（9/25）を取材・調査し、その都度整理しまとめた。

子ども達は、この活動を通して自分が生活する塘路のよさだけではなく、地域の人々の温かさに触れることができた。



（3）まとめ・発表【11～3月】

今後の学習活動として、

◆取材や調査してきたことをまとめる。

○原稿をチェックしP Sにまとめる。

◆交流及び発表する相手や場面の確定。

○標茶小学校（6年生）

○中茶安別小学校（集合学習）

○2月参観日。

を予定している。交流や発表の中で、どんな意見や感想が出てくるか、期待と不安を抱きながら、今までの取材や調査の整理と分析をまとめているところである。



4 結びに（校長としての願い）

塘路の素晴らしさを再発見し、他の地域の人たちに塘路のすばらしさを伝えるための活動が目下進行中である。先日、校内意見発表会があり、高学年のある児童が「守り続けたい塘路の自然」と題して発表を行った。この総合的な学習の時間の取組がきっかけで、観光客が何のために塘路に来るのかという疑問から、もっと塘路の自然や文化を知ってもらいたいという気持ちになり、塘路の自然を守り続ける意味や価値を見付けることができたことと力説していた。昭和の時代に塘路湖周辺が別荘開発されそうになったとき、水源の森を守り、地域の人々が協力して自然を守ってきた経緯についても触れ、今まで塘路を守ってくれてきた人たちの努力を決して無駄にしたいという決意と力強く訴える姿が印象的であった。

本校では「小規模校」「へき地校」というマイナスイメージを「強み」と捉え、小中連携という教育活動も進めている。これらの取組が家庭や地域、子ども達にとって「誇り」となり「自己実現力」を高め、「郷土愛」を育むことになる。その実現のために、これらの活動が一時的で断片的な取組で終わるのではなく、教育課程の中にしっかりと位置付け、様々な人たちとのかかわりの中で、子ども達の主体性を育むことが、「社会に開かれた教育課程」を実現する一つの戦略になると確信している。